

「数学SF 夢は全くひらかない」

山野浩一

市がたつというので一番にやってきたのだが、位置を間違えたのか、いんちき情報にひっかかったのか遠い地のことで判らないが、いちに私の早合点があったようだ。いちいち捜してもいられない知人もいない血のつながった人間もちろんだ。荷はどうにも重く、にこにこ笑ってもおれず、逃げだしてきただけに似顔絵などで人相がわれているやも知れず、日本中に身のおきどころのないおれには臭いすら気づかわねばならないのだ。散々な目にあうのはもう三度目などで誰かさんなどにはかかわらず、三下ともつきあわず、さんすけや山椒売りをしながら退散時だけを見計らって、ゆっくり散歩もできない生活に参加してきたのだが、もう死などは怖いとも思わないが、しちめんどうなことはしたくなし、知ることすらさけて忍んでしくしく泣いて生きていくしか能はない。今となってはごろついていた年頃は午後堂々とごきげんになって歩き廻り、ごたくをならべたもんだが、ろくでもない人生だ。ろくろく生き方などというものを考えることはなしに、ロックなどを聞いて、心のドアのロックも忘れ、ついでに人生語録も失ったが、そんなものをトロク考えてきたため釧路くんだりまで流れてくるはめになったのだ。質

屋通いをしていた頃はましちゆうもんだ、ナワバリの失地回復のいいだと、しちめんどうな手続きののち、結局はやり合つてどんどんぱちぱち、ばかもんばかりがはち合わせ、鉢巻まいて、八幡様におまいりしても、蜂の巣つuitたようないちかばちか勝負にや同じこと、結局四苦八苦で生きのびたものの苦勞をねぎらつてくれるものなどない。喰うや喰わずで靴のすり切れるまで逃げてとうとう北海道。はるばるきたぜ釧路へなどとイキがつてもいられない。いい時代は遠い昔、トウのたつた身体じゃ出直しもできない。当分この商売続けなきや暮らせないのが当世つてもなさ。街じゆう市のたつところを捜し廻つて、ようやく獣医近くつてのを聞き、十二時にやつてきたが、はて、しじゅう荷を背負っているだけに今日中さんざん捜し歩くこともできず、苦汁始終なめ続け。十五、十六、十七とおれの過去は暗かったが、今じゃ暗かろうが明るかろうがどうたつていい、せめて市のたつ場所だけでも誰か教えてくれないものだろうか。

”話の特集”の「ピース・ホープ・ハイライト・セブンスター・いこい」につづいて懸賞小説第二弾

◎この作品の総和を求めよ！